記念講演　文化賞　漫画家　井上　雄彦　氏

司会：受賞のご感想と、漫画を描くということ、また「スラムダンク奨学金」について、最後に若い方へのメッセージをお話しください。

井上：漫画家になるときには想像もしていなかったので、文化賞に漫画を選んでいただいたことは大変光栄ですし、本当に感謝いたします。

漫画家として25年程たちますが、自分自身、常に変化し続けているので、俯瞰的な視点で漫画全体や文化を語ることはまだできないというのが正直なところです。

上野の森美術館で開催した『最後のマンガ展』が、意識して大きな絵を描くようになった一番大きなきっかけです。美術館という場が求める大きさにこたえようとすると、どんどん大きくなりました。東本願寺の屏風のプロジェクトは随分悩みましたが、自分にできる表現はやはり漫画だと、絵的に漫画であっても、そこに躍動感や親鸞の人生が絵に表現できていれば、見る側が様々に想像してくれるだろうと考えました。

宮本武蔵を題材にした『バガボンド』では、ペンの硬さが嫌で、連載途中に面相筆に持ち替えました。偶然できた線も取り込んで、剣の動きや肉体表現等、もっと柔軟に表現できればと思っています。この作品は、僕は読者とどこかつながりを感じていて、あえて分かりやすくしなくてもきっと伝わるに違いないと、信頼に頼った描き方をしています。

漫画をつくるうえで、ネームが一番重要な作業で、この段階で作品の良し悪しが決まるのでとにかく時間をかけます。全体の6割ぐらいがネームで、実際絵を描くのは4割です。僕は自分もキャラクターと同じ目線に立って、一緒に物語をつくっていきます。キャラクターが自分で道を見つけて僕に答えをくれる、そんなつくり方です。

『スラムダンク』はバスケットボールを題材にした漫画で、僕の代表作です。バスケットボールという題材に出会えたことは、僕にとってとても幸運でした。発行部数が累計1億部を超えたとき、僕はバスケットボールへ恩返しがしたくて、バスケの好きな若い人に、より広い世界で経験を積んでもらい、その経験を生かしてもらえればと考え、出版元の集英社と奨学金を創設しました。今年6期生が決まり、来春からアメリカへ行く予定です。英語能力の問題があるので、まずはプレップスクールで学んでもらいます。アメリカの地域や学校での生活が、いい経験になると思います。

漫画の休載中、仕事場と自宅の間にある木の存在に、僕はふと気がつきました。僕は、締め切り等、心の中が余分な事柄でいっぱいで、今までその木の存在に気づきませんでした。これは僕にとって大変重要な、気づかされる経験でした。

若い人達には、自然と人間が共存していることを日々感じられる状態でいてほしい。ありのままの自分に戻るきっかけは、僕たちの身近に、至るところにあることを忘れないでほしいし、僕も大切にして生きていきたいと思い、漫画の中にそこはかとなくメッセージを込めています。